

令和 6 年 6 月 1 7 日現在

機関番号：33909

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13971

研究課題名（和文）小学校における国語科マルチモーダル・リテラシー学習指導プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Multimodal Literacy Learning Instruction Program for Japanese Language Arts in Elementary Schools

研究代表者

松岡 礼子（MATSUOKA, REIKO）

至学館大学・健康科学部・准教授

研究者番号：50845998

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：我が国の国語科メディア・エデュケーション研究を牽引してきた大阪教育大学国語科メディア・エデュケーション研究会の実践研究の成果を手掛かりに、絵本・写真・映画を素材として、小学校における国語科マルチモーダル・リテラシー学習指導プログラムの開発をおこなった。絵本が幼保小をつなぐ、まごうことなき子どもの文化財であって、学習者の既存のマルチモーダル・リテラシーを頼みにアフターコロナの国語教室の学習指導が展開する実態を捉えると同時に、組み写真制作が中学校の文学教材で出会う一人称の回想の物語の疑似創作体験となることを報告し、義務教育課程9年間を見通した国語科教育におけるメディア教材の可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的独自性と創造性は、国語科の学習指導に、言語をモードのひとつと位置づけるマルチモダリティ理論を導入した点にある。コロナ禍において長期間にわたり対面授業の機会を逸した学習者の、自他のコミュニケーションの場づくりが喫緊の課題となったアフターコロナの国語教室の実態を捉え、学習者の既存のマルチモーダル・リテラシーを掘り起こし、発話を促し、対話からテキスト批評へと学習指導展開を可能にする現代絵本の教材性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Based on the results of practical research conducted by the Osaka Kyoiku University Research Group, a Japanese language multimodal literacy learning and teaching programme was developed for elementary schools, using picture books, photographs and films as materials. The picture books are the indisputable cultural assets of children that connect kindergartens, nursery schools and primary schools, and we have captured the actual situation in which the learning and teaching in After Corona Japanese language classroom develops by relying on the existing multimodal literacy of the learners. It was reported that the production of composite photographs became a pseudo-creation experience of the first-person recollection stories encountered in junior high school literature teaching materials, and the potential of media teaching materials in Japanese language teaching, looking at the nine years of compulsory education courses, was clarified.

研究分野：国語科メディア・エデュケーション

キーワード：国語科教育 イギリス比較国語教育 マルチモーダル・リテラシー コミュニケーション 絵本 教師教育 解釈力 批評

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、国語科メディア・エデュケーションの実践研究において先進的な取り組みを続けるイギリス国語科教育研究と、その比較国語教育をもとに我が国の国語科メディア・エデュケーション研究を牽引してきた大阪教育大学国語科メディア・エデュケーション研究会の実践研究の成果を手掛かりに、Society5.0時代の国語科教育の展開を見据え、我が国の国語科マルチモーダル・リテラシー学習指導プログラムの開発を目的とするものである。

イギリスで1988年に成立したナショナル・カリキュラムにはメディア・エデュケーションの概念が導入された。メディア・エデュケーションを「言語、解釈、意味に関する根本的課題をあつかうもの」とし、「その意味で国語教育と目的を同じくする」と述べた。結果、国語科のカリキュラムには、ニュース番組、テレビドラマ、映画など、動画テキストを学習材として積極的に活用する方針が提示された。2007年改訂では「マルチモーダル・テキスト」の文言が明記され、読むことにおいて解釈をとまなうものは全て国語科であつかうとの姿勢が踏襲された。プリントメディア、オンスクリーン・メディア、デジタル・メディア、ノンリニア・テキスト等、マルチモーダル・テキストの内実が多様な言語で示され、学習者を取り巻く環境を全て取り込もうとの意図が、その用語に表れている。

イギリスにおける国語科学習指導へのマルチモダリティ概念の導入は、言語のみに寄り掛かった国語科の学習指導では立ち行かない実態を捉えた、多言語文化共存社会における現実的な言語政策の反映と考える。ここに、入管法の改正に踏み切った我が国の今後の国語科教育を考える上で、イギリスの経験に学ぶことの意義があり、我が国の国語科マルチモーダル・リテラシー教育の実践理論構築を急ぐ理由がある。

これまで大阪教育大学国語科メディア・エデュケーション研究会(1996.4)における共同研究によって、学習者に身近なメディアを吟味し、社会文化的リソースとして価値ある教材(ポスター、CM、新聞、映画、絵本など)の発掘と授業構想・提案をおこない、実践理論研究、実践検証と省察に関わってきた。

本研究会の研究成果は、『国語科メディア・エデュケーション研究誌』創刊号(1998.4)第2号(1999.4)第3号(2000.9)第4号(2011.9)および、松山雅子編著『自己認識としてのメディア・リテラシー：文化的アプローチによる国語科メディア学習プログラムの開発 PART』教育出版(2005.5)『PART』教育出版(2008.8)ギュンター・R・クレス著/松山雅子監訳/増田ゆか・松尾澄英・松岡礼子共訳『マルチモダリティ：今日のコミュニケーションにせまる社会記号論のこころみ』渓水社(2018.12)として公刊し、広く大学教育の場、教育委員会、小中高等学校現場において社会的貢献を果たしてきた。のみならず、小中高等学校教諭と協働したパイロット授業、フィードバック授業、公開ワークショップ、現職研修を並行して実施し、学習者実態把握のみならず指導者の関心の掘り起しと、広義の現職研修の役割を果たしてきた。

本研究は、この一連の実践理論研究の成果を踏まえ、今日の高度情報化社会におけるさらなる社会文化的要請に応えるべく、ギュンター・R・クレス(1940-2019、前ロンドン大学教育研究所マルチモーダル研究科長)のマルチモダリティ論の知見をもとに国語科メディア・エデュケーションの実践理論の構築を目指す研究の一環に位置づけるものである。

## 2. 研究の目的

研究目的は以下の3点にまとめられる。

1. 学習者の日常的言語環境と国語科の授業で学ぶ言語能力を不可分にかかわらせ、高度情報化社会における自律した言語生活者の育成を目指す。

2. 自らの「読む、書く、話す、聞く、見る、身体表現する」などの日常的な意味生成過程に自覚的な学習者を育む、学習指導理論の構築、その理論に基づく学習指導プログラムの構想と教材開発を試み、パイロット実践を通して現職教諭と研究者の共同研究を実施する。

3. 現職教諭と研究者が共同で、学習者実態把握に努めながら実践的に研究を進め、これまでも主要課題であった評価基準を構築し、提案する学習指導プログラムを国語科カリキュラムの中に無理なく位置づける可能性を明らかに提言する。

## 3. 研究の方法

研究の方法を以下の3段階(1)～(3)の手順にもとづいて報告する。

### (1) 基礎考察

改定学習指導要領のめざす言語能力の省察と先行開発学習指導プログラムの相対的再考をおこなった。また、研究協力者・共同研究者である小学校教諭と学習者実態把握を共有し、開発研究の基盤プランを構築した。研究協力者によるアニメーション映画の予告編を教材化した低学年向け学習指導プログラムを、教職を志す学生対象の模擬授業で展開し、既存のリテラシーの掘り起しの方法を検討した。大阪教育大学国語科メディア・エデュケーション研究会が開発した「組み写真」を用いて現職研修をおこない、プログラム参加者の反応分析から「組み写真」制作が中学校の文学教材で出会う一人称の回想の物語の擬似創作体験となることを導き、高学年向けメディア教材としての「組み写真」の意義を明らかにした。

以上の通り、基礎考察における既存のリテラシーの掘り起こしの対象は小学生のみならず、教職を志す学生、現職研修の参加者である教員としている。時宜を得て基礎考察に臨むため、初年度から最終年度まで、都度、基礎考察の段階に立ち戻りつつ、パイロット実践、発表へと発展させた。

## (2) 教材開発およびパイロット実践

初年度から最終年度にかけて共同研究者である小学校教諭とともに開発した教材および単元を以下 ～ にまとめた。いずれのパイロット実践も大阪府下の公立小学校でおこなった。

低学年説明文定番教材の出典（絵本『たんぼぼ』）を用いた教材開発

高学年物語文定番教材の出典（絵本『海のいのち』）を用いた教材開発

現代絵本『どうぶつえん』を用いた高学年向け単元開発

## (3) 実践理論の公開

上記の共同実践研究の成果は、小学校の国語科教育の場に求めるために、指導者向け実践理論の解説と具体的学習方法の体系的指示と実践事例報告、評価観点を所収した実践概論書、松山雅子編『書くことの力をはぐくむマルチモーダル・アプローチ：自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして』渓水社（2021.8）に「すごいね！たんぼぼ：六年生から二年生へ『たんぼぼ』を説明しよう」（共著）として報告し、現職教員向けワークショップや学会で公開した。

## 4. 研究成果

計4年間の研究期間の内、後半2年間の研究には新たな勤務地で臨んだ。令和3年度はコロナ禍において長期間にわたり対面授業の機会を逸した学習者の、ことばの力の掘り起こしと自他のコミュニケーションの場づくりを喫緊の課題ととらえ、学習者の発話を促し、話し合いや作文の学習指導への展開を容易にする、現代絵本の教材性に着目した研究・普及活動を継続履行した。愛知県岡崎市立根石小学校教職員研修「絵本の語りをよむ」において、学校現場におけるアフターコロナの学習指導を模索する教職員に対して、自他の対話を促す教材選びと、教材研究の方法としてのマルチモーダル・アプローチの位置づけについて提言した。また、教員志望の学生自身のマルチモーダル・リテラシーの育みと、令和型の国語科学習指導の提言のために活用した素材および学生反応について、第74回中国四国教育学会自由研究において報告し、「小学校におけるマルチモーダル・アプローチを活かした国語科学習指導：現代絵本『どうぶつえん』（未邦訳）の教材性に関する一考察」を『教育学研究紀要』第68巻（CD-ROM版）に発表した。

最終年度は、メディア教育学者デビット・バックinghamが近著、水越伸監訳／時津啓・砂川誠司共訳『メディア教育宣言』世界思想社（2023.11）で述べた、経験主義の国イギリスにおける「教授学的戦略」のダイナミズムに沿い、我が国の熟達した現職教員によるメディア教材を活用したパイロット授業を価値づけ、小学校から中学校への学習を架橋する国語科メディア・エデュケーションの可能性と課題を明らかにした。具体的には、「読むこと（テキスト分析）」と「書くこと（創造的創作）」および「文脈分析（個別の読み書きの営みを、より広い社会的文脈に位置づけること）」のダイナミズムの中で批評の言葉が育まれるさまを、学習者反応分析を通して検討し、研究成果は第75回中国四国教育学会自由研究において報告し、「マルチモーダル・リテラシー学習指導プログラムの開発：小学校高学年におけるメディア教材を活用した国語科実践研究の意義」を『教育学研究紀要』第69巻（CD-ROM版）に発表した。また、授業開発に用いた現代絵本のアフターコロナ社会における教材性をまとめ、スージー・リー作／カンムンジョン・松岡礼子共訳『どうぶつえん』サウザンブックス社（2024.3）を翻訳刊行した。

研究期間全体を通じて、当初の目的に掲げた3点の達成度を評価すると、おおむね達成することができたのは次の2点である。すなわち、「1. 学習者の日常的言語環境と国語科の授業で学ぶ言語能力を不可分にかかわらせ、高度情報化社会における自律した言語生活者の育成を目指す。」および「2. 自らの『読む、書く、話す、聞く、見る、身体表現する』などの日常的な意味生成過程に自覚的な学習者を育む、学習指導理論の構築、その理論に基づく学習指導プログラムの構想と教材開発を試み、パイロット実践を通して現職教諭と研究者の共同研究を実施する。」である。「3. 現職教諭と研究者が共同で、学習者実態把握に努めながら実践的に研究を進め、これまでも主要課題であった評価基準を構築し、提案する学習指導プログラムを国語科カリキュラムの中に無理なく位置づける可能性を明らかに提言する。」については、教師の説明言語による評価の意義と課題について論究の余地を残した。

研究の初年度に、新型コロナウイルス感染症の拡大により当初予定していた渡英計画が頓挫し、研究計画の大幅な見直しを余儀なくされた。国内では緊急事態宣言の発出により、学校現場への立ち入りが困難になり、基礎考察およびパイロット実践に遅れが生じることとなった。

一方で、対話によるコミュニケーションが著しく制限された社会生活が続き、最も懸念されたパイロット実践の対象者である小学生のレジリエンス（回復力）について、身近なメディアである絵本が果たすエンパワーメント効果に気づく機会を得た。学校生活が平常のコミュニケーションの場として再び機能し始めるために、教員と学習者がもっとも安心して没入できるコンテンツを手探りしているなかで、おのずと選ばれてきたのは、共同研究者である現職教員が得意とし、学習者がコロナ前から親しんできた身近なメディアである、絵本であった。絵本は幼保小をつなぐ、まごうことなき子どもの文化財であって、その力を頼みにアフターコロナの国語教室の学習指導は展開した。子どもが、コロナ禍に失った子どもたちの時間を取り戻すために、教育現場には今しばらくの猶予時間が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 松岡礼子	4. 巻 68
2. 論文標題 小学校におけるマルチモーダル・アプローチを活かした国語科学習指導：現代絵本『どうぶつえん』（未邦訳）の教材性に関する一考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 455-460
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栗野志保・松岡礼子	4. 巻 47
2. 論文標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導の可能性（2）：絵本『海のいのち』を用いた学習指導過程の考察を中心に	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語と教育	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栗野志保・松岡礼子	4. 巻 46
2. 論文標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導の可能性：初等国語科教育法を学ぶ学生反応の考察にもとづいて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国語と教育	6. 最初と最後の頁 63-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松岡礼子	4. 巻 69
2. 論文標題 マルチモーダル・リテラシー学習指導プログラムの開発：小学校高学年におけるメディア教材を活用した国語科実践研究の意義	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 207-212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1．発表者名 松岡礼子
2．発表標題 小学校におけるマルチモーダル・アプローチを活かした国語科学習指導
3．学会等名 第74回中国四国教育学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 松岡礼子・粟野志保
2．発表標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導（４）絵本『海のいのち』を用いた学習指導過程の考察
3．学会等名 第140回全国大学国語教育学会春期大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 松岡礼子・粟野志保
2．発表標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導（５）たんぼ絵本の比べ読みの場合
3．学会等名 第141回全国大学国語教育学会秋期大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 松岡礼子・粟野志保
2．発表標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導（２）
3．学会等名 第138回全国大学国語教育学会春期大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 松岡礼子・栗野志保
2．発表標題 小学校におけるメディア教材を活用した国語科学習指導（３）
3．学会等名 第139回全国大学国語教育学会秋期大会
4．発表年 2020年

1．発表者名 松岡礼子
2．発表標題 小学校におけるマルチモーダル・アプローチを活かした国語科教育の研究
3．学会等名 第75回中国四国教育学会
4．発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1．著者名 松山雅子	4．発行年 2021年
2．出版社 溪水社	5．総ページ数 316
3．書名 書くことの力をはぐくむマルチモーダル・アプローチ：自己認識としてのメディア・リテラシーをめざして	

〔産業財産権〕

〔その他〕

授業開発に用いた現代絵本のアフターコロナ社会における教材性をみとめ、スージー・リー作／カンムンジョン・松岡礼子共訳『どうぶつえん』サウザンブックス社（2024.3）(ISBN: 4909125485)を翻訳刊行した。
--

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	粟野 志保  (Awano Shiho)		

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------